九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

特別活動における子どもの有能感に関する一考察

増田, 健太郎
九州大学人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/15651

出版情報：教育経営学研究紀要. 10, pp.37-44, 2007-05-31. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law, Graduate School of Kyushu University
バージョン：
権利関係：

教育経営学研究紀要　第10号　2007年　37－44

特別活動における子どもの有能感に関する一考察

増田　健太郎
（九州大学／准教授）

Ⅰ　研究の課題と目的
Ⅱ　研究の方法
Ⅲ　調査の結果及び考察
Ⅳ　まとめと課題

Ⅰ．研究の課題と目的

教育改革の時代である。総合的な学習の導入・学校評議員制・学校選択制・コミュニティスクール等，矢継ぎ早に改革の波が押し寄せている。

総合的な学習が導入される際には，従来の学力偏重から生きる力を育成する教育課程の計画・実践が行われることが期待された。しかし「学力低下」の論調が強くなると，文部科学省は「確かな学力の向上のための 2002 アピール『学びのすすめ』(1)」を発表し，「生きる力路線」から「学力重視路線」へとシフト変換を行う様相を呈した。「ゆとりを目指した学習指導要領が本格実施された 2002 年以降，日本は『学力調査の時代』を迎え」(2)，学力重視へと転換しつつあるのは皮肉な傾向である。さらに，日本の児童生徒の学力が国際比較の中で低下していることを示した PISA（OECD 学習到達度調査 2003 年調査）の調査結果によって，学力重視の方向へ加速度的に移行している。そのような状況の下，総合的な学習も「多忙化への自己調整機能として，前年度と同様なものをマニュアル通りに行うという『固い枠』に転化」(3)していると同時に，多くの小学校の総合的な学習の時間に英語学習が取り入れられているのが現状であろう。

「知・徳・体」の言葉に象徴されるように，日本の学校は従来知的側面だけではなく，子どもの人間としての全面的発達を保障する場として期待されてきた。しかし，学力重視志向によって，「知育」が重視される一方，06 年 10 月以降連鎖的に起こったいじめ自殺報道や安部内閣によって設置された教育再生会議によって，教員の免許更新制・教育課程・教育委員会制度の見直し等，教育の在り方そのもの見直しの論議が起こっている。

そのような状況の中，カリキュラムの中で直接的に影響を受けるのは特別活動である。周知のように特別活動は「望ましい集団活動を通して，心身の調和がとれた発達と個性の伸張を図る」ことが目標の一つであり，児童生徒に顕在化しているコミュニケーション能力・学習意欲・モラル形成には大きな意味を持っている。しかし，ゆとり教育の見直しなどの論議の中で，特別活動についての論究は行われていない。教育の問題は，学力だけではなくいじめ問題に象徴されるように，広義のコミュニケーション能力の育成が不可欠であるが，学力と生きる力の育成は別の次元で論議されているのが現状であろう。

「基礎基本」の学力と「生きる力」の総合的な学習，モラル向上のための道徳は教育論議とともに，特別活動がもつ教育的・心理学的意味について再考することが求められる。総合的な学習と特別活動は教育課程上は分かれているが，集団を媒介とすること・体験活動を重視すること・自主性を重視すること等の方法論において，双方は多種多様な学習と体験が含まれており，共通する項目も多い。特別活動と総合的な学習で培われる心理的能力・態度で重要なことは，「①創造性②リーダーシップとフォロアーシップ③表現力④自己と個性⑤学習に対する責任感⑥共感力と支援力⑦自己効力感⑧自主的態度⑨競争的態度と共同的態度⑩集中力⑪環境との調和を実践する態度⑫国際理解教育で伸ばす知識・能力・態度⑬情報教育で伸ばす知識・能力・態度」（弓野，1998）である。特別活動は子どもの心身の調和の発達を保障する教育活動である。「学力か生きる力か」という論争の中で，

カリキュラムにおける再編の視点が，「教科教育か総合的な学習か」に焦点化されているが，子どもの学習に対する動機付け・自己効力感・自尊心育成における特別活動の果たす意味は大きいと推察される。

そこで，本稿の目的は特別活動が子どもの成長実感，特に有能感にどのような影響を与えているかを明らかにすることである。また，子どもたちの成長を保障する教育課程経営の在り方についても若干の考察を加えたい。

Ⅱ．研究の方法

1．調査対象

子どもが自分の成長を実感し，小学校生活を対象化できる小学校６年生（計423名）を調査対象とした。調査対象校４校（A小・B小・C小・D小）（表1参照）である。各学校の担任・教務主任に面接調査を行った。

2．調査方法

(1) 質問紙調査の枠組み

本稿では子どもの特性の１つである有能感に焦点をあて，教育活動と子どもの有能感と成長実感（子どもが成長したと感じる感覚）との関連を分析する。有能感とは，「自分は～ができる」という気持ちであり，「～について自信がある」と捉えることができる。調査では，桜井(1992)の児童用コンピテンス尺度を利用し，「学習領域」（10項目）・「社会・友人関係領域」（10項目）「運動領域」（10項目）「自己価値」（10項目）のそれぞれについて，「役に立たなかった」「どちらかと言えば役に立たなかった」「どちらかと言えば役に立った」「役に立った」の４件法で尋ねた。また，教育課程と成長実感との関連を調べるために，各教科・総合的な学習と特別活動（学級会活動・児童会活動・修学旅行など10項目）についても，同様の４件法で尋ねた。

(2) 調査実施状況

調査の実施時期は，小学校生活が終わりを迎えようとする２月である。質問者による解答の誤差を少なくするために質問紙調査校に筆者及び研究協力者（1名）が行き，同一の教示によって，質問紙調査を行った。質問紙の内容は，生活習慣・家庭での過ごし方・家庭学習の方法・学校や学級に対する意識調査，教師対象の面接調査を行った。学力・成長と課題，特別活動の担任としての意識，勉強する理由，ストレス成長に役立った教科や教育活動等120の質問項目である。

子どもたちの成長実感と特別活動との関連を詳細に分析するために，Ａ小学校では３つの方法で調査を行った。

第１に，「自分が成長したこと」をテーマとした卒業アルバム文集の分析を行った。文集を分析対象にした理由は，全員が同じテーマ・分量で書いた記述であること，子どもたちが成長したと実感できた教育活動を抽出することに適しているからである。

第２に，04年度Ａ小学校卒業生97名を対象に，質問紙調査[4]を郵送法で行った。回収されたうち有効回答は51件（回収率52.5%）。調査時期は2005年７月～８月である。

第３に，卒業児童 15名の集団面接調査(05.7.30)，保護者 12名の集団面接調査（05.8.5）と保護者５名の個別面接調査(05.10)を行った。

表１　調査校及び調査方法

	調査校 調査年月	学校テーマ	学校規模 ６年生学級数 児童数	調査方法
1	Ａ小学校 05.7	総合的な学習	19学級 ３学級 97名	質問紙（卒業後調査） 文集分析 面接調査　保護者・児童 担任
2	Ｂ小学校 05.2	国語	17学級 ３学級 99名	質問紙（６年生児童） 面接調査　担任
3	Ｃ小学校 05.2	国語	23学級 ４学級 136名	質問紙（６年生児童） 面接調査 担任・教務主任
4	Ｄ小学校 05.2	総合的な学習	18学級 ３学級 91名	質問紙（６年生児童） 面接調査　担任

表２「各教科・特別活動における子どもの成長実感」学校間比較

		B校		C校		D校		全体		A校	
	活動の意味づけ	N=97		N=136		N=91		N=324		N=51	
次のことはあなたの「成長」に役に立ったと思いますか。		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
教科	4の平均教科	3.24	.61	3.18	.62	3.18	.65	3.18	.65	3.42	.66
	国語	3.26	.82	3.24	.73	3.04	.87	3.19	.80	3.31	.73
	算数	3.35	.74	3.36	.72	3.33	.79	3.35	.74	3.47	.76
	理科	3.07	.83	2.98	.89	2.95	.86	3.00	.86	3.29	.76
	社会	3.29	.84	3.14	.81	3.20	.93	3.20	.85	3.61	.70
	道徳	3.12	.86	2.57	.92	2.97	.92	2.85	.93	3.37	.69
特別活動	学級会活動	2.74	.88	2.22	.88	2.65	.94	2.50	.93	3.12	.82
	児童会活動	3.02	.89	2.49	1.02	2.76	.98	2.72	.99	3.06	.79
	クラブ活動	3.26	.83	2.88	.95	2.99	.98	3.02	.94	3.20	.87
学校行事	学校行事の平均	3.36	.57	2.98	.62	3.12	.62	3.12	.62	3.44	.57
	運動会	3.26	.93	2.67	.95	2.86	.98	2.90	.98	3.43	.73
	遠足	2.92	.96	2.32	.96	2.37	.98	2.52	1.00	3.15	.77
	自然教室	3.59	.67	3.40	.82	3.36	.78	3.44	.77	3.52	.71
	修学旅行	3.68	.59	3.54	.65	3.64	.68	3.61	.64	3.68	.71

最高得点4点　M平均値　SDは標準偏差

(3) 教師の面接調査の実施状況

Ａ小・Ｂ小・Ｃ小・Ｄ小の６年生担任（計9名）・教務主任（計1名），総計 11 名に，各学校及び教師全体の特別活動に対する意識・教育課程編成上の課題についての面接調査を行った。

３．質問紙調査の結果及び考察

(1) 子どもの成長実感の学校比較

表２は各教科・道徳・特別活動において，「成長に役立ったと思うか」（成長実感）についての評価の平均値を算出し，学校間比較をしたものである。Ａ校は卒業後３ヶ月経過しての追跡調査の結果である。また，学校行事は特別活動の一つであるが，各行事ごとに算出した。

その結果，３校とも各教科は成長実感に効果はあるが，道徳・特別活動（児童会活動・学級会活動・学校行事）においては学校での差が見られる。これは，各学校における道徳・特別活動に対する取り組み方の差がある結果と受け取ることができる。また，集団宿泊的行事である自然教室及び修学旅行は「自分の成長に役立っている」という得点が３校とも高い。日常から離れた空間で教育活動が行われるだけでも，子どもたちは楽しさを感じることは容易に想像できるが，成長実感を感じるためには，そこに，教育的意味を感じ取られる教育活動が必要となる。「自然教室・修学旅行において，フィールドワークの活動を取り入れるなど，子どもの成長を活かした活動を積極的に取り入れた」（D小6年担任）こととの相関もあると考えられる。

集団宿泊的行事は児童が楽しみにしている学校行事あり，非日常的空間での教育活動であるために，子ども達の参加動機は高くなる。その中での教育的営為は，子どもに直接的効果をもたらすとともに，長期的記憶によって，成長実感として受け止められるていることを示唆している。逆に，学級会・児童会活動等は，日常的な活動であり，動機付けから考えると自発的ではなく外発的動機付けであることが多く，成長実感が得られにくいことが推察される。有能感との関連で考えると，教師の指導性が発揮される教育活動である。

(2) 有能感による子どもの成長実感の違い

有能感によって，子どもの成長実感がどのように違うかを明らかにするために，Ｂ・Ｃ・Ｄ校とＡ校の調査結果の分析を行った。表３・４は，「社会・友人関係領域の有能感」の水準によって，「特別活動の意味づけ」と「教科教育との意味づけ」に違いがあるのかについて，それぞれ独立したサンプルの t 検定よって分析した事例校の結果である。なお，有能感（社会・友人関係領域）の水準のグループ分け（高群・低群）は，有能感（社会・友人関係領域）10 項目についての評価の平均値をもとに，中央値によりサンプルを折半した。

表3　BCD校における各教科 道徳 特別活動と子どもの有能感との関連

有能感 社会人 友人関係領域)　　高群(N=112) N群(N=115)

質問紙調査校BCD校	M	SD	M	SD	t	p
教科活動の意味づけ	3.19	.72	3.13	.59	0.78	n.s.
国語 算数 理科 社会の平均						
道徳の授業の意味づけ	2.74	1.00	2.71	.89	0.22	n.s.
特別活動の意味づけ						
学級会活動	2.45	.96	2.34	.90	0.87	n.s.
児童会活動	2.66	1.04	2.53	.99	0.97	n.s.
クラブ活動	3.04	1.00	2.8	.90	1.93	↑
学校行事	3.18	.53	2.85	.63	4.29	※※

運動会 遠足 自然教室 修学旅行の平均　　↑p<.05, ※p<.05, ※※p<.01

表4　A校における各教科 道徳 特別活動と子どもの有能感との関連

有能感 社会人 友人関係領域)　　高群(N=24) N群(N=27)

事例校A校	M	SD	M	SD	t	p
教科活動の意味づけ	3.57	.63	3.29	.66	1.57	n.s.
国語 算数 理科 社会の平均						
道徳の授業の意味づけ	3.68	.58	3.15	.72	2.59	※
特別活動の意味づけ						
学級会活動	3.13	.85	3.11	.80	0.06	n.s.
児童会活動	3.25	.74	2.89	.80	1.67	↑
クラブ活動	3.46	.66	2.96	.97	2.09	※
学校行事	3.68	.36	3.23	.64	3.02	※※

運動会 遠足 自然教室 修学旅行の平均　　↑p<.05, ※p<.05, ※※p<.01

また，意味づけについては，その活動が役立ったかについての各項目の評定値をもとに分析を行った。教科教育（国語・算数・理科・社会の4項目）・道徳・学校行事（運動会・遠足・自然教室・修学旅行）の意味づけ，それぞれについて算出した平均値を用いた。道徳・学級会・児童会活動・クラブ活動は１つの項目についての評価を用いた。

Ａ校においては，教科に関しては有能感の水準によって意味づけに違いはみられない（t=1.57, n.s.）。一方，特別活動との関連では，有能感（社会・友人関係領域）の高い子どもの方が，学校行事・クラブ活動・児童会活動について，成長に役立ったという意味づけが高い（t=1.67 ~ 3.02, p<.10 ~ .01）。結果は表４にまとめて示した。このことから，対人活動に自信がある子どもには特別活動が有効に機能するが，自信がない子どもには配慮が必要であることが示唆される。

また，Ｂ・Ｃ・Ｄ校におけるこの社会・友人領域の有能感と活動の意味づけとの関連も，同様の傾向が見られた。

子どもの有能感を育成される場面は，学校・家庭・塾・スポーツクラブが想定されるが，意図的・計画的に有能感を育成する場は，学校教育である。表３・４に見られるように，教科においては，有能感との関連は見られないが，クラブ活動・学校行事においては，有意に差が見られる。クラブ活動・学校行事とも児童の自発性を基盤にした展開が考えられる自由度が高い教育活動である。

ここで留意する点は，有能感がある子どもが自発的に活動を展開し，教師がポジティブなフィードバックによって，その有能感が強化されるのであれば，有能感が高い子どもは益々高くなり，有能感が低い子どもは，他者との比較によって，有能感がさらに低くなる悪循環に陥ることもあり得る。ゆえに，特別活動によって，子どもの有能感を高めるためには，子どもの特性を見極めた上での意図的・計画的な教育活動の展開が求められよう。

体験活動が有効であるかどうかは，学習者の特性と教授法の組み合わせの問題であり，適性処遇交互作用（ATI）の理論と対応することが考えられる。この結果は，特別活動においても，子どもの特性に応じた方法論の視点を持つことの有用性が認識される必要性があることを示唆している。

４．自由記述分析

(1)分析方法

子どもの成長実感と教育課程との関連を明らかにするために，Ａ校の調査を行った。調査方法は，自由記述分析・質問紙調査及び面接調査である。

表５は，Ａ校６年生の 97 名の卒業文集の内容分析である。「成長実感」を抽出するための資料として卒業文集を用いるのは３つの理由による。

・「小学校生活で成長したこと」をテーマとして書かせていること。

・全員が小学校生活をふり返る 12 月(5)に書いたこと。

・書く文量が全員一定であること。

まず，児童の文章の内容を特別活動・総合的な学習等，教育課程のカテゴリーで分類し，キーワードを抽出する。その際，書いている対象が２つ以上ある場合はそれぞれをカウントする。次に，成長実感を表しているキーワードを抽出し，協力・達成感などで内容が近いものをまとめてカウントした。

表5　自由記述（卒業文集）分析

成長内容	運動会	修学旅行	自然教室	遠足	入学式	代表委員会	委員会・クラブ	集会活動	特活　計	総合学習	その他
	特別活動										
協力	10	8	6	1					25	9	
リーダー性	3	5					2	5	15	2	
達成感	6	0		2					8	7	2
自主性	1	0							1		
楽しさ	2	2	2	1	2				9		
平和	0	18							18	3	
思いやり				1	1				2		
自省			1						1		
発言力						1			1		
積極性							1		1	14	2
人間関係									0		5
その他									0	3	8
	22	33	9	5	3	1	3	5	81	38	17

表６ 有能感尺度の記述統計および信頼性（α係数）

有能感尺度	項目数	項目例	平均値	SD	信頼性（α係数）
学習領域	10	勉強はクラスの中でできる方だ	2.67	.54	.817
社会 友人領域	10	友だちはたくさんいる	3.08	.46	.826
運動領域	10	運動は得意な方だ	2.78	.75	.904
自己価値	10	自分には自信がある	2.62	.55	.813

【児童の卒業文集の例】

いい経験になった

ぼくは，６年生になって球技クラブに入り部長になりました。最初部長がなかなか決まらず，先生が「お前たちは来週も話し合いたい。」と言った時，せっかくの機会だしやってみようと思い部長になりました。でも，次の週から球技が始まるので，ぼくがクラブの中でも一番大勢の人数をまとめるのはちょっと不安でした。（中略）

ぼくは，今年のクラブは去年よりもみんな協力しててきぱきとしていたのでよかったと思います。ぼくは，このクラブに入り部長というものになりとてもいい経験ができました。部長になってよかったと思います。そのおかげでふだんでも，以前よりは発表ができるようになりました。

注）教育課程上の分類　クラブ（特別活動）

成長キーワード　リーダー性

表７ 各活動と成長実感分析

活動の意味づけ 次のことは，あなたの成長に役に立ったと思いますか）	平均値	*SD*
教科		
国語の授業	3.31	.73
算数の授業	3.47	.76
理科の授業	3.29	.76
社会の授業	3.61	.70
道徳の授業	3.37	.69
特別活動		
学級会		
学級会活動	3.12	.82
児童会活動	3.06	.79
委員会活動	3.27	.85
学校行事		
遠足	3.15	.77
修学旅行	3.68	.71
自然教室	3.52	.71
クラブ活動	3.20	.87
卒業式	3.61	.72
運動会	3.43	.73
総合的な学習の時間		
総合的な学習 キャリア教育	3.71	.61
総合的な学習の創作劇	3.73	.63
音楽会	3.10	.78
ボランティア活動	3.22	.73
卒業試験	3.57	.85

（2）分析の結果

表５は卒業文集で書かれたことを教育活動ごとに成長のキーワードで分類したものである。子どもたちが成長したと感じる教育活動は特別活動が 81 件 59.6%（選択数全体 136），総合的な学習 27.9%，その他 12.5%である。その他の内訳は日常生活や個人の活動に属することが８件，友達に関することが６件，先生に関することが２件，授業に関することが２件である。

前述の質問紙調査でも明らかなように，子どもたちが小学校生活の中で成長を実感するのは，特別活動が多い。それは，短期間に集団で目標に向かって行う活動が特別活動には多いため，強く印象に残ることが考えられる。また，「成長した」と実感でき，自分の何が成長したかを言語化できるところに，特別活動の本質が表れているとも

考えられる。

特別活動の目標である「集団の一員としての自覚を深め，協力すること」の達成度を見てみると，特別活動全体の中で協力 25 件・リーダー性 15 件計 40 件（41.9 %）となっており，特別活動の目標と子どもの成長の実感は関連していると考えられる。教師がどれだけ特別活動の目標を意識して教育を行っているかに関わらず，特別活動の中で，子どもたちは「心身の調和がとれた発達」をしていることが示唆される。

本分析においては，その特別活動における子ども達の成長実感が抽出された。しかし，今，問われている教育課題は，「学級崩壊・不登校・いじめ・学力不足」である。特別活動の目標である「よりよい生活を築こうとする自主的・実践的態度」を日常生活にまで転移させることが，教師の実践的な課題であると言える。

(3) A校の質問紙調査から

表 6 は有能感の評定値である。学習領域（*M*=2.67）・運動領域（*M*=2.78）・自己価値（*M*=2.62）に比べて社会・友人領域（*M*=3.08）が高い。児童と保護者の面接調査においても，「学習面・運動面とも自信を持っている子どもはA校には少ないが，友達関係は良好である。」という答えが多く得られた。

表 7 は各活動（教科・特別活動・総合学習等）が役に立ったかどうかについての評定（4件法）の平均値である。調査時が中学校生活に慣れた時期（1学期末）であるため，中学校での学習に役に立つかどうかが判断基準になっている。社会が他教科に比べて（*M*=3.61）と高い得点なのは，都道府県名・平野・川などの地理的な基礎的事項や歴史の基礎的事項を徹底させた結果であると考えられる。調査用紙の自由記述欄に「都道府県名のテストがあり，A校の出身者は高得点者が多いので，社会の先生から誉められた。」と記述した子どもが 3 名いた。卒業試験は「算数・国語・理科・社会」の四教科について，中学校の定期考査と同じ方法で 2 回（1/8・2/20）行ったことが，高得点につながったと考えられる。

特別活動においては，卒業文集分析でも成長に役に立ったと答えた子どもが多かったように，遠足・集団宿泊的行事である修学旅行（6 年 1 泊 2 日）（*M*=3.68）・自然教室（5 年 3 泊 4 日）（*M*=3.52）健康安全・体育的行事である運動会（*M*=3.43）が高得点である。「卒業式が成長に役に立った。」と評定した子どもも多い。（*M*=3.61）卒業式は 6 年間の集大成であり，呼びかけを通して，成長を保護者や教師・地域とともにふり返ることができ，得点が高かったと考えられる。

特別活動は行事を中心としたスポット的な活動であるのに対して，総合的な学習はキャリア教育の一環として，中学校・高校・大学のフィールドワークを 1 年間継続的に活動したことが，特別活動よりも得点が高くなった理由と考えられる。

学級会活動（*M*=3.12）・児童会活動（*M*=3.06）・委員会活動（*M*=3.27）の得点が低い。それは，活動の多くが自主的な話し合い活動を保障したものとして位置付けられていたのではなく，与えられた議題を話し合うだけであったためだと考えられる。卒業文集分析では，リーダーシップが身に付いたと記述した児童が 3 名いたが，子どもの意識の中では，集会活動と児童会活動が結びついておらず，児童会活動のイメージがなかったと推測される。

5．特別活動に対する教師の意識

児童の質問紙調査・自由記述分析によって，子どもたちが成長を実感する教育活動の中心に特別活動があることが明らかになった。しかし，平成 15 年度の教育課程編成・実施調査[6]によれば，平成 14 年度の年間授業時数の実績は多くの学校が標準時数を上回っているが，中学校の学校行事においては，その削減が指摘されている。小学校においても，学校行事を始めとする教科外の削減は浸透しつつある。

では，特別活動の教育課程をつくる教師の意識はどうだろうか。教師の面接調査から明らかになったことを整理すると次の 3 点にまとめられる。

① 教科の基本的授業時数の確保である。学校行事の時数を教科に回す必要がある。

- 修学旅行は「総合的な学習」「社会」とする。
- 自然教室は「総合的な学習」「理科」「図工」「音楽」「学年裁量」とする。
- 運動会は「体育」運動会が終わった後はしばらく体育がない。

・卒業式の練習も「国語」「音楽」の授業とする。

・お別れ遠足は実施しない。

各学校では標準授業時数を確保するために，従来特別活動で計算していた時数を各教科に振り分けている。しかし，授業時数は確保できても，各教科の内容も進める必要があるのため，特別活動の実質的な時間は削減せざるを得ない。各教科と特別活動の連関を考えての教育内容の創造ではなく，苦肉の策としての置き換えである。つまり，「ゆとり教育」の中で，特別活動も教科学習も詰め込まざるを得ない状況になっているのである。

② 総合的な学習のカリキュラム作成・準備 で多忙になってきているので，特別活動まで教師の意識が向いていない。

総合的な学習も一定のマニュアルにそったもので，特別活動も例年通りの提案が多い。新しい内容を創造し展開する意識が教師には足りない。特別活動を研究・実践している教師がいても，その学級だけで広がりがない。

③ 特別活動の研究会や発表会の参加が少ない。特別活動そのものの目標・意義を認識していない教師が多い。学級会の進め方や学級組織の作り方など，基本的な教師としてのスキルが身に付いてない教師がいる。

新学習指導要領の教育課程作成上の課題として，総合的な学習のカリキュラムをどう創っていくかであったが，この学力重視の動きとして，基礎学力の向上をはかるための授業改善の方法に教師全体の意識が向き，特別活動には意識が向いていない現状であることが示唆された。

Ⅳ．まとめと課題

本研究において，特別活動は子どもの成長実感に対する効果が高いことが明らかになった。しかし，教師の意識は特別活動の教育内容の工夫まで意識が向いていない現状もある。つまり，教師が「例年通り」というルーティーン・ワークとして行っている教育活動であっても，児童は成長を実感できるという特性が特別活動にはあると言える。仮に教師がより教育効果を意識した特別活動の内容を創造することができたら，より大きな教育効果が得られることが推測される。子どもの有能感を基盤とした成長実感を子どもが持てることが，学力向上・多忙感から充実感へ転換させ，生徒指導上の課題も解決する可能性が示唆される結果である。

前述したように，特別活動と総合的な学習で培われる心理的能力・態度は「①創造性②リーダーシップとフォロアーシップ③表現」等共通したものが多い。そこで，標準授業時間確保のために，単に帳面上での授業時間の置き換えをするのではなく，総合的な学習の時間 110 時間と特別活動 35 時間計 145 時間の枠組みを活用し，連関性のある教育課程を創り出していく必要があると考える。そのためには，特別活動で得られた有能感が教科学習や日常生活に転移させるという意識が教師には必要である。教育課程で区分された枠組みにとらわれるのでなく，子どもの教育効果を基軸とした各教科・特別活動・道徳・総合的な学習の連関性を考慮した教育課程の編成が求められる。そのために必要なことは，教師のカリキュラムマネジメントの力量であり，特別活動において得られた子どもの成長実感を各教科に転移させていく教授力量である。

特別活動においては，教師自身が自発的に問題意識を持ち，実践していく姿が求められる。さらに，「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに，集団の一員としての自覚を深め，協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度」という特別活動の目標は，教師自身の課題でもある。

本研究は，４小学校の質問紙調査及び面接調査での分析を試みたものである。

研究上の課題として，質問紙調査の対象校を増やし，児童の意識と教師の意識の相関を分析すること，教師集団が創造的なカリキュラム開発ができる学校組織文化の諸条件を明らかにすることである。また，実践上の課題としては，子どもの成長実感が他の場面に転移させるための教育方法の開発である。

教育改革が進行する中，研究者が実態分析の中で明らかにした知見を各学校現場の状況に合わせた方法で読み解き，その改善策を学校と研究者が協働で研究・実践していく新しいアクションリサーチの方法の開発も急務である。

【註】

(1)「確かな学力の向上のための 2002 アピール 『学びのすすめ』」(平成 14 年1月)「学びのすすめ」によって，基礎基本や自ら考える力を身につけることから発展学習にまで言及したこと，また，学力調査・授業評価の導入によって，学校現場では，「学力中心」にシフトし直す契機と捉えられる傾向が強い。

(2)刈谷剛彦・志水宏吉，2004「学力の社会学－調査が示す学力の変化と学習課題－」岩波書店１頁

(3)拙著，2004「『ゆるやかな枠』を基調にした総合的な学習の実証的研究－実践的課題に焦点をあてて－」『九州大学教育経営研究室紀要』第７号

(4)質問紙調査，質問紙の質問項目は，質問紙調査対象校の質問紙と同様の項目と中学校生活について質問項目の２部構成。本稿においては，前者の項目の回答のみ使用した。

(5)卒業文集は小学校６年生の 12 月に書くため，６年生の３学期の特別活動（お別れ集会・卒業式等）は含まれない。

(6)中央教育審議会答申(2003.10.7)の「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」

【参考文献】

弓野憲一，1999，特別活動と総合的な学習の心理学，ﾅｶﾆｼﾔ出版桜井茂男，1997，学習意欲の心理学－自ら学ぶ子どもを育てる，誠信書房